

Grammatical Features of Chinese Phrases Including a Verb and Adjective "Qingchu /清楚" I

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/788

中国語動詞と形容詞“清楚”とが構成する 統合型の文法的意義特徴(Ⅰ)

大 滝 幸 子

1	はじめに	p2
2	考察対象とする言語資料の作成方法	p2
3	意義素論と現象素論の観点からみた、統合意義特徴の位置づけ	p3
4	“清楚”の意義素記述	
4.1	中国語形容詞の下位分類と“清楚”の位置づけ	p7
4.2	形容詞の下位分類と否定形式から導かれる【V A型の統合意義特徴Ⅴ】	p10
4.3	類義語グループからの“清楚”の意義素記述	p12
5	V A型、V得A型、A地V型の各共起制限の比較と、その文法分析	
5.1	調査資料の作成方法	p19
5.2	“問”“打听”への“清楚”類の形容の仕方	p22
§ 1	：【S V A O】統合型での“清楚”“明白”	p23
§ 2	：文の意味と“问清楚”“问明白”の統合意義	p25
§ 3	：“问糊涂”の統合意義を通して考察する“把”統合型の 3パターン	p28
§ 4	：“明确地问”と【A地V型の統合意義特徴Ⅲ】	p33
5.3	“讲”“说”“解释”“谈”“表达”への“清楚”類の 形容の仕方	
§ 1	：動詞の賓語と【A地V型】	p35
§ 2	：“明确地”と思想的な生産行為動詞	p38
6	おわりに	p39

1 はしめに

筆者はこれまで、中国語の動詞（Vと略す）と形容詞（Aと略す）とが構成する次の三種類の統合型の「統合型そのものが表す文法的意義特徴（以下、統合意義特徴と呼ぶ）」を考察してきた¹⁾。

I，述語結果補語統合型（以下，V A型と略す）

II，述語様態補語統合型（以下，V得A型と略す）

III，状語中心語統合型（以下，A地V型と略す）

本稿は形容詞を“清楚”に固定し，“清楚”が各種類の動詞とどのように組合わさるかを資料としてとりあげ，考察をさらに深める事を目的とする。

具体的には，意義素論の手法だけでは適切な説明理論を構築できない事例について，統合意義特徴の本質，すなわち語義研究と文法研究との接点にあたる言語構造の機能は何かを再考する事を通して，認知意味論の観点にたち現象素論を意義素論に結び付けた語義・文法の記述方法を模索した。

2 考察対象とする言語資料の作成方法

北京，上海，沈陽，四川省の出身者から「V A型，V得A型，A地V型の統合型の中で，“清楚”を各動詞と組み合わせて使うか使わないか」という内省報告を集めた。その内省報告には当然のことながら異同があるが，異なる報告の出た組み合わせのみを全員に文脈を添えた用例として配布し，再度「聞いて理解できるかできないか，自分も使うか使わないか」について確認をとった。最終的には内省報告の揺れをできる限り捨象したデーターとして共通の回答とばらつきのある回答とを区別して，双方ともに記録した。本来ならば，その記録が統計措置を加えるに足るだけの質量を備えていることが本研究の理想的ありかたであるが，諸般の事情により極めて限られた資料のみを考察対象とせざるを得なかった。ただし，数の少なさをカバーすべく，標準語話者として高い水準の言語生活を営んでいる知識人にインフォーマントとしての協力を依頼し²⁾，ばらつきのある回答を特定する際にはマンツ

ーマンでの聞き取り調査を行って、文脈的意義を出来る限り想起してもらえるように努めた。

しかし、こうして内省報告された語感も日常的かつ混然とした語用感覚であり、統合型全体の意義（以下、「統合意義」と呼ぶ）だけを取り出されて報告されているとは限らない。「ある動詞と“清楚”の組み合わせによる統合意義」として報告された語感には、同一文中の他の言語形式が表示する意義が文脈依存意義として含まれている事が多い³⁾。また、使えないとされた組み合わせでも、使えない理由にまでは内省が届かないのが普通である⁴⁾。ましてや理論的にはその存在を認めざるをえないものの、抽象的な記述にならざるを得ない「統合型内での品詞の並べ方が表す統合意義特徴」がそのまま意識されることは皆無に近い。したがって、インフォーマント調査資料は本研究の考察対象として、いわば原材料にあたるものであり、その内省報告は研究者が意味論文法論を立論する際に直接的な論拠として扱うわけにはいかない。意義素分析や現象素抽出を行おうとする観点から吟味を加えたうえで、はじめて立論の根拠としての価値が生じるものといえる。

3 意義素論と現象素論の観点からみた、統合意義特徴の位置づけ

具体的な用例分析と立論にはいる前に、まず、本稿が目的とする統合意義特徴の分析とは、どのような言語観に基づく意味分析なのか、またどのような手順によって行われるべきものなのかについて、作業仮説をのべておく。

インフォーマントの内省報告を整理しようとする場合、前後の文脈により使えたり使えなかったりするという報告のゆれが見いだされるが、この言語事実がすなわち統合意義の中に（統合を形成する単語の意義の他に）文脈依存意義が含まれていることを示している。そしてこのことは、人間の発話行為の中でも「全体は構成要員の総和以上の存在である」とするゲシュタルト的認知が行われていることを示す具体例の一つと言えよう。ゲシュタルト的認知は認知言語学⁵⁾の成立根拠の一つとして用いられた、人間の認知の方法に関する仮説である。

認知言語学はゲシュタルト心理学の一派の提唱したゲシュタルト（形態・形態特性）⁶⁾の高度に簡潔化された「よいゲシュタルト」という概念を、語義成立に関わるカテゴリー化の過程と結び付け、語義とその事例を「プロトタイプ（典型）」と周辺的なものに区別する。また、語義の説明に図解を用いる他、ゲシュタルトの原理の内「連続の原理」を適用して、使役構文をエネルギーの流れ（アクションチェーン）として解釈したり、話し手が主語と述語を選定する際に「地と図」（「閉合・連続の原理」適用）の対比が用いられていると説明し、一定の説得力を獲得しつつある。

このような記述方法は、従来からの「言語の意味を言語で定義しようとする試み」がどうしても乗り越えられない説明理論の限界、すなわち言語による堂々めくりを突破する効果的な代案と言える。

本稿では「一つの統合型をはさむ前後の言語形式によって表示される文脈の意味のうち、どのような意味がその統合型の成立を左右するのか？」という問題提起に対し、「その統合型は文という上位の言語単位の中であって、どのような地を得れば、一つの図としてのまとまりを獲得できるのか？」という認知言語学的観点から回答を見いだそうと試みる。つまり、上記の如きゲシュタルト的認知を統合意義特徴の分析にも用いようと試みる。すなわち文（単文・複文を含む）を一つの全体とし、統合型を部分とする視点から統合意義特徴を捉えようとする。そこで、本稿でいうところの統合意義特徴は、意義素論の体系内に位置つけた場合、以下のような意義特徴として定義つけられる。

「統合型を一つのまとまった意義単位として、文の意味からとりだす機能を担う文法的意義特徴」

そして認知意味論の観点にたって、この統合意義特徴の定義を現象素論と次のように対応させることにする⁷⁾。

「ある文の全情報を一つまたは複数の状況として、一つまたは複数の図版にみたてた場合、どの情報を背景（＝地）とし、どの情報を現象素粋（＝図）として統合形式に対応させるかを決定する認知過程」

つぎに、何故筆者が統合意義特徴の分析に関して意義素論と現象素論の双方を用いる必要があると考えたのか、その理由を述べる。

従来の意義素論の枠組みでは、文法的意義特徴は個々の単語形式の意義素内に配属されて存在するものであり、いかに「統合型には統合型独自の文法的意義特徴が存在する」というテーゼを唱えようとも、それは原則上「個々の単語の文法的意義特徴の呼応の方式」として記述されることになる。ところが意義素論の理論体系では、呼応の作業原則によって形式的なデータ処理を行うことはできても、呼応の方式を記述し説明する独自の概念は見いだせない。例えば國広1982をはじめ、意義素論に基づく文法的意義特徴の記述は個々の文法機能語の単語レベルでの語義分析に密着するものである^(*)。

こういう意義素論本来の個別言語における個別意味体系の発掘に関しては、認知意味論の諸概念を先取りする業績があげられているにも関わらず、個別言語の文法分析については、呼応の方式に関する概念をはじめ、未だ体系を構築するに至っていない。それは、単語の品詞レベルでの並び方（統合型）が、具体的な単語間の統合のあり方をデータとして処理するための作業用の枠組みとしてのみ扱われ、「どういうメカニズムが何故この二つの単語をこう並べるのか？」という問題提起が行われてこなかったからであり、呼応の方式そのものを言語分析の対象とする道がとざされてきたからである。

また、意義素論では意義素の体系そのものは個別言語独自の体系とするが、意義素を構成する意義特徴のレベルでは各意義特徴を語義面・文法面ともに「人間が言語を操る意識に共通して存在する」普遍的要素であると仮定する。そして、分析対象とした言語の意義素の個別性と意義特徴の普遍性を橋渡しするために、いくつかの説明理論を備えている。

(1) 意義素を同定するために、ある単語の意義素として必要不可欠な意義特徴（弁別特徴）と、具体的統合によって選択されたり、または抑圧されたりする意義特徴（関連特徴；時に文化的情緒的に喚起される心的内容）とを区別する。

(2) 池上1975で提案された示差的特徴、つまり意義素体系を構築する各意義素を区別するために必要不可欠な意義特徴を特定する。

このような説明理論およびそれに基づく作業仮説は、当然語義面と文法面の両面について適用されるべきである。ところが、文法面については管見の限り、正面から普遍性を前提とする議論がなされるほどには、文法的意義特徴のリストが整備されていないと考えられる^④。品詞の定義に関しても、服部1960：p204で最初に＜名詞的意義質＞＜動詞的意義質＞＜形容詞的意義質＞という名称が意義素実質とは性質が異なるものとして提起されたのち、國広1982：p67で、文法的特徴を＜品詞的特徴＞＜統語的特徴＞として区別するに至っても、単に呼称が提示されるに留まり、普遍的定義として通用し得る定義と意義素論の体系内での位置づけが明示されているとは言えない。

筆者自身もこれまでの自らの研究の道程において、意義素論の体系下にある方法論では、個別言語の用法パターンを遺漏なく調査して、表層の形式的特徴である統語的特徴を整理することはできても、深層の品詞的特徴を抽出することはできないものと予測する。深層の構造が「自然言語に普遍的に存在する意味的文法的要素およびその機構がある」とする仮説に基づいて追求されてきた説明理論である以上、意義素論でも文法的意義特徴における普遍性を保証しうる記述方法を検討する必要があるだろう。

そこで本稿では、國広1994で提唱された「現象素」の概念を、自然言語の個別性から本質的に解放された普遍的単位として次のよう扱うことにする。

- ① 外界および精神界の様相を、話し手が言語形式を使用する際に、意義素が指示しうる範囲に枠つけて切りとることによって現象素が成立する。
- ② その現象素を言語使用時に伝達しようとする情報全体の一部として位置つけることによって現象素枠が成立する。
- ③ 現象素枠を成立させる普遍的な言語的認知過程が、叙述の営みであり、また統合意義特徴として記述されるべき言語行為の特徴である。

このように、現象素を人間の普遍的認知過程を通して成立する「枠づけられた様相」と捉えることによって、「個々の認知過程のあり方を記述する」ことが、普遍性を保証された文法的意義特徴の記述することになると考える。そして、現象素論は認知言語学的観点を駆使した普遍的意味論文法論として、意義素論においてその存在を指摘されながらも的確な記述がなされてこなか

った統合意義特徴を, 「個々の文法的意義特徴の呼応」としてではなく, 「一連の認知過程」として考察し記述することができるものと予測する。

以下, 意義素論の体系に基づく言語体系内の分析結果については【義】の符号を付し, 現象素論の体系に基づく認知過程としての考察結果については【現】の符号を付し, 両者の接点すなわち個別文法性と普遍文法性の両立のうえにたつ, 文法的意義特徴の記述を試みることにする。

4 “清楚”の意義素記述

前項での仮説に基づいて, まず意義素論の体系を用いて形容詞“清楚”の意義素のうち, 語義的意義特徴を記述する。

4. 1 中国語形容詞の下位分類と“清楚”の位置づけ

本稿では筆者がこれまでの中国語形容詞の意味研究に於いて用いてきた意味的概念を使用し, 下記の原則にたって“清楚”の用法を考察する。

〔考察の原則Ⅰ〕【義】

判断形容詞 (ex. “清楚”) と, その評価形容詞形 (ex. “很清楚”) と, 描写形容詞形 (ex. “清清楚楚”) を区別して考察する。

筆者は形容詞にも動詞と同じく単独で述語となる文法機能がある以上, 動詞に対して設定されてきた「格(case)」を適用して, その構文的機能における優位性または支配力を記述するべきだと考えた。しかし, 「当該形式以外の言語形式を用いて表示される, 意義素内の意味的事項」を「格」と見なすという従来 of 学説の常套的定義に基づき, 語義的意義特徴の束をまとめる概念として「意味的事項」という呼称をたてて, 形容詞の下位分類を試みた。

本稿では形容詞の下位分類として, 以下の類をたてる。「～者, ～対象, ～方法, ～結果」の各項目が, 形容詞の意味的事項を指す⁽⁹⁾。

【判断形容詞】(朱1956. における, “性质形容词”と成員が同じ)

判断者 : 不定人称者 (認知活動を行う, 社会的かつ不特定の存在)

判断対象：事物の属性（恒久的性質，ex. 形状）または性質（一次的性質，ex. 速度，全身または皮膚感覚）

判断方法：【程度が数値化できるグループ（計量・形状）】

ex. “长，短” “快，慢” cf. 反義語の対をなす。

両極を有し，かつその間に程度の区別がつけられるスケール（「判断スケール」と呼ぶ。）を用いる。

判断スケールを代表する極は，ベクトルの延長がさし示す側すなわち数値の大であるほうになる。

【程度が数値化できないグループ（色彩・味覚・感覚）】

ex. “红，白” “甜，辣” “暖和，冷，疼”

触覚・視覚・聴覚および味覚・温度感などの知覚を通して想定される典型的な事例（「プロトタイプ」とよぶ）を基準とし，それとの隔たりの程度を図るスケール（「帰属度スケール」と呼ぶ）を用いる。

ただし，具体的な事例を比較する場合は，統合形式を用いて判断スケールも表示できる。ex. “红一点儿”

判断結果：属性または性質が基準値と比較したうえで両極のどちらに近いのか，または，その知覚がどのプロトタイプに最も近いのかを判断する。一部の判断には，評価性（評価形容詞の意味的事項「評価対象」を参照）が伴うこともある。

したがって，判断形容詞の格（「判断対象格」）は，判断スケールまたは帰属度スケールをあてることのできる物体または出来事を表示する言語形式に拠って担われる。

【評価形容詞】 単独形式では，従来の“褒貶形容詞”と成員が同じ‘‘‘’。

統合形式では，副詞“很”と判断形容詞や感覚・感情形容詞との統合などがある。統合形式を「評価形容詞形」と呼ぶ。 ex. 好，坏，干净，脏，舒适，笨

評価者：不定人称者または第一人称者（統合型内での単語の組み合わせを決定する，言語知識を有する社会的存在。）

評価対象：プラス価値(ex. 快・愛好・有用)またはマイナス価値(ex. 不快・嫌悪・打撃)を社会常識として付加された属性または性質

評価方法：帰属度スケールの中に、明確なプラス価値またはマイナス価値が含まれる。その価値に値するかしないかという、スケールの分かれ目(「分割点」と呼ぶ)を定める。帰属度スケールには両極が無い(反義語が存在しない)場合もありうる。

評価結果：価値に帰属するものとして評価する。

したがって、評価形容詞の格(「評価対象格」)は、帰属度スケールをあてることができる物体または出来事を表示する言語形式に拠って担われる。

なお、“很”の意義素については、大滝1996c.p21を基にして、以下の如く記述することにする。付属語を使用する言語行為者はすべて第一人称者であって、原則として話し手に特定できる。また、付属語の意義素は統合形式を構成する文法的意義特徴だけから構成されている以上、現象素論を用いた記述を行うことになる。

【“很”の文法的意義特徴I】【現】

判断スケールを用いて、文脈・場面内で比較の基準とされていた数値を「分割点」として設定しなおしたのち、判断対象格の指示する現象素の程度を一方の側の領域に固定する。

【“很”の文法的意義特徴II】【現】

帰属度スケールを用いて、評価対象格または原因格^{‘11’}の指示する現象素が、その形容詞の典型的意義素のアイデア^{‘12’}範疇内に所属することを確定する。

【描写形容詞】(統語的特徴としては①否定できない②“很”がつかない。

単独形式では、朱1956.における“状态形容词”に成員が同じ。

統合形式では、判断・評価形容詞の重疊形や“够～的”など否定形の無い統合。統合形式を「描写形容詞形」と呼ぶ。)

ex. 雪白, 通红, 绿油油的, 胡里胡头

描写者：不定人称者または第一人称者（描写形容詞形をつくる）

描写対象：事物の個性的な、すなわち比較の対象を有しない、属性
または性質

描写方法：スケール（判断，帰属度ともに）を用いず，一定の視点
から特徴を見いだして描く

描写結果：他の特徴を排除し，個性的なものとして特徴を捉える
したがって，描写形容詞の格（「描写対象格」）は，一定の視点から個性
を見いだし得る物体または出来事を表示する言語形式に拠って担われる。
本稿で分析の対象とする“清楚”について考慮すべき形容詞としての語義
上の分類は以上3種類である。

筆者は中国語形容詞に「感覚・感情形容詞」というもう1種類の下位分類
をたて，格として「経験者格」（具体的行為を行う「動作主格」と区別する）
「原因格」（全身感覚を引き起こす時空や，不安歓喜を生み出す原因となる
事物など）をたててきたが，本稿では詳述しない¹³⁾。

4. 2 形容詞の下位分類と否定形式から導かれる【VA型の統合意義 特徴V】

前項での意味的事項の規定の記述で，[考察の原則I]すなわち「ムキ身
の“清楚”が判断形容詞であり，“很清楚”が評価形容詞形，“清清楚楚”
が描写形容詞形である」という区別について説明を加えた。

この区別に基づいて考察を進めれば，VA型では判断形容詞と（評価形容
詞形ではなく）評価形容詞のみが統合されるのに対し，V得A型とA地V型
では原則としてその反対であるということを文法的に説明できると考えられ
る。本項ではさらに，否定副詞“不”と形容詞が統合された形式もVA型で
用いられないことについて考察を加え，VA型では単独形式としての判断形
容詞と評価形容詞しか用いられない原因が，VA型の統合意義特徴にあると
いう予測のもとにたち，VA型の統合意義特徴について5番目の記述¹⁴⁾を
行うことにする。

まず、意義素論における否定形式の考察として、国広1982（注5参照）p67での言及をとりあげる。ここでは意義素の内部構造として、意義特徴を次のように3分類している。

- ①文法的特徴（品詞的：統語的）
- ②語義の特徴（前提的：本来的）
- ③含蓄の特徴（文体的：喚情的：文化的）

この中で、前提的特徴を「否定文で用いた場合、否定されないで残る部分」、本来的特徴を「否定文で用いた場合、否定される部分」として区別している。この定義に用いられる‘否定文’とは、連文の接続にまで文法レベルをあげて捉えた否定ではなく、最もミニマムな「否定形式」との統合によって表示される最小の統合意義を指している。品詞的特徴を同じくする「独身者」と「産婆」，「ナガレル」と「モグ」，「オロス」（反義語は「ノセル」であろう）と類義語「サゲル」について、おのおの前提的特徴と本来的特徴の例が挙げられていが、形容詞についての例は挙げられていない。

本稿では、上記の前提的特徴に相当する語義的特徴を「固定特徴」と呼び変えて記述し、本来的特徴に相当する語義的特徴を「可変特徴」と呼び変える。名称を呼び変えたのは、‘前提’や‘本来’という用語はディスコース分析にあてるのが、より常套的な用語法であると考えたからである。

本稿の中国語判断形容詞の意義素記述の方式から言えば、固定特徴は意味的事項のうち、判断者および判断対象（判断対象格ではない）に関する語義的意義特徴のすべてと、判断方法に関する語義的意義特徴の一部である。なぜなら形容詞の肯定と否定の区別そのものが判断方法の変化によって生じるとみなせるからである。可変特徴は意味的事項のうち、判断方法に関する語義的意義特徴の一部と判断結果に関する語義的意義特徴のすべてとなる。また、中国語の描写形容詞は可変特徴をもたないことになる。

そこで、大滝1996. “很” “不” の考察などを考慮にいれたうえで、中国語形容詞に関する否定形式と肯定形式の文法的対立について、次のような〔考察の原則II〕をたてることにする。

〔考察の原則Ⅱ〕【現】

中国語形容詞の否定形式はスケールをあてることのできる語義について成立する。（可変特徴としての判断方法の「スケールの使用法」について成立【義】）判断スケールを用いた場合、判断・評価対象格が指示する現象素¹⁵⁾の様相の程度が、形容詞が表示するアイデアの反対側のアイデアの方に近いとする。

帰属度スケールを用いた場合は、分割点を飛び越えてアイデアに帰属しない側に所属するとする。

共に判断評価に用いるスケールのベクトル的方向の逆方向に注目させ、かつ、逆方向側に現象素の程度を所属させる認知過程である。

さて、ここで、V A型では単独形式（ムキ身、肯定形）のしか統合できない理由を、①スケールを固定する認知過程がV A型の統合意義特徴と競合する（“很”が使えない）。② スケールのベクトル方向を逆転させるさせる認知過程がV A型の統合意義特徴と競合する（“不”が使えない）。という2点に求めてよいかと考えられる。その結果、次の統合意義特徴の存在が認められる。

【（N）V A（了）型の統合意義特徴V】【現】

V A型の中では動詞現象素が指示する相プロセスに対し、形容詞現象素もスケールを一定方向にたどって変化するプロセスを認知するものでなくてはならない。

4. 3 類義語グループからの“清楚”の意義素記述

意義素の体系は各言語ごとに成立する閉じた体系である。そこで、最初に中国語で中国語を解釈する中中辞典の記述を検討することにより、“清楚”の意義素の大略を捉えることにする。

中国において定評のある中中辞典として次の三種類の辞書を取りあげた。

- ① 《现代汉语词典》（略称をX Yとする）商务印书馆1996

中国内外を問わず、語義解釈の引用がもっとも多い代表的現代語辞典

② 《形容词用法词典》(略称をX Yとする) 湖南出版社1991

初めて語法的に形容詞を扱った用法辞典として紹介記事が多く出された

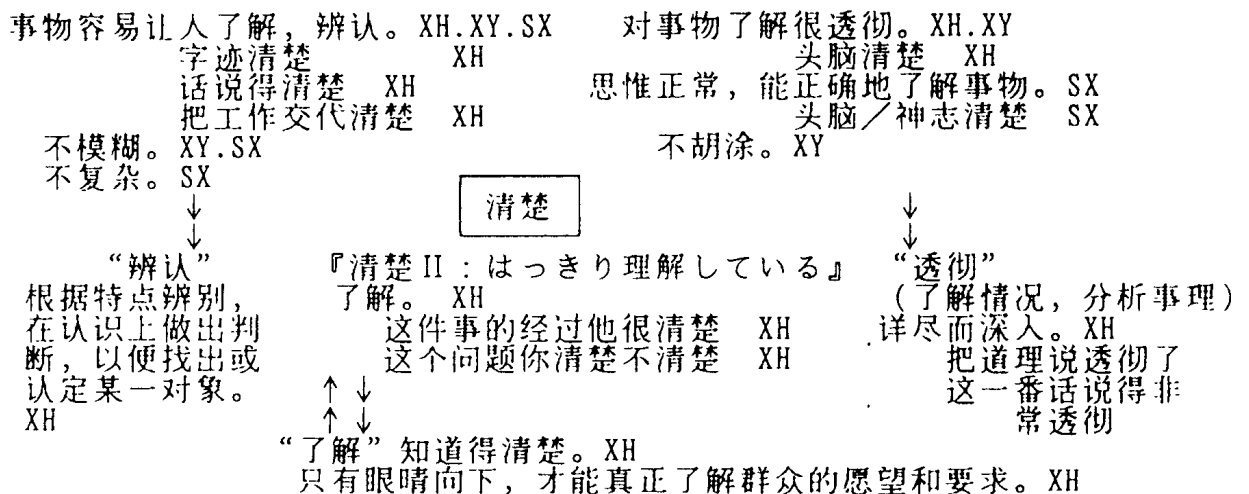
③ 《实用汉语形容词词典》(略称をS Xとする) 中国标准出版社1990

各種文学作品からの用例が豊富に収集されている

この三種類の辞典から、“清楚”の語義解釈をたどっていくと、中国語として「言い替え可能な語彙項目グループ」すなわちシソーラスの概略を以下の【図 I】として描くことができる。

【図 I】『』内の日本語解釈は筆者の記述

『清楚 III: (事物が) 弁別しやすい』 『清楚 I: 理解能力が優れている』



“清楚”という形容詞の語義解釈が他の形容詞によって行われずに思考動詞“了解”を軸として「認識が成立する過程」の中の諸段階として記述されていることによりことがわかる。このことから、“清楚”が中国語の形容詞語義体系の中で、言い替えではすませられない基本的な語義を表示していることが窺い知れよう。

本稿では、筆者がこれまで検討してきた“清楚”の用例と、【図 I】での語義解釈の整理とを合わせ鑑みて、“清楚”の三種類の語義(以下、語義 I・II・IIIと呼ぶ)を「ある認識が成立していく一連の過程」として記述する。

【“清楚”の語義的意義特徴の関連図】【義】

<語義Ⅰ> 認識主体に潜在的能力がある（明かなプラス評価）

人間が理解能力という点で優れているという<属性>

↓

<語義Ⅱ> 認識主体が能力を発揮する

人間が事物を正確に理解しているという<性質>

↓

（→変化の対極にある状態は“胡塗”）

<語義Ⅲ> 認識の対象となる事物が備えている性質を捉える

人間によって明確に識別され理解されうる<性質>を有する

（→変化の対極にある状態は“模糊”）

これらの語義を、4. 1項での中国語形容詞の下位分類の定義と対照するならば、弁別的意義特徴を次のように捉え直せる。

<語義Ⅰ> 評価対象として人間の理解能力の水準をとる，評価形容詞

<語義Ⅱ> 判断対象として人間の判断行為の様相をとる，判断形容詞

<語義Ⅲ> 判断対象として事物の状態をとる，判断形容詞

“清楚”を述語として用いた用例において、主語の位置にどのような言語形式が組み合わされているかが、この考察の妥当性を裏付けている。

また、これらの語義が互いに関連性の深いところから、「多義語構造」が構成されていると認め、文脈・場面によってこの3種類の語義のどれかが、選択されたり抑圧されたりするものと考ええる。すなわち、“清楚”の意義素内に存在する語義的意義特徴の3グループとして、今後の考察に用いることにする。

なお、“清楚”の意義素が示す多義語構造が一連の認識過程によって結ばれていることを、認知言語学の視点から捉え直すと、「理想認知モデル¹⁶⁾ 類型」を端的に反映した語義構造と見なすことができる。本稿ではとりあげないが、文脈分析において、文脈的意義の支配を受けた「語義の選択と抑圧」について考察する場合に、状況から現象素を取り出す取り出し方と関連づけた記述を行う必要が生じる。その時、この多義語構造と理想認知モデルを結

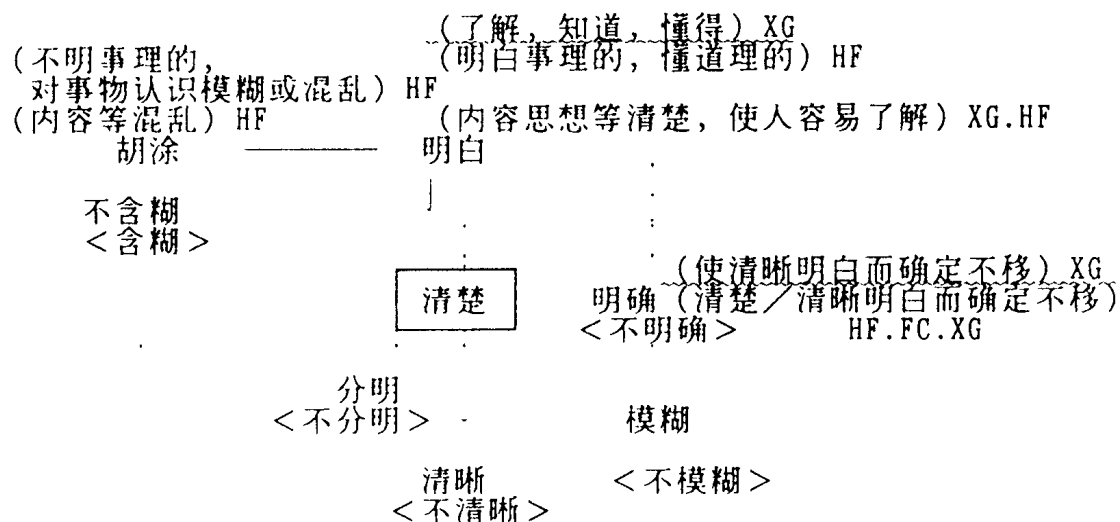
ひ付けた考察方法が効力を発揮するものと予測される。

次に、類義語・反義語辞典を考察対象に加えて、直接的にシソーラスを通して“清楚”の意義素を考察する。語義 I・II・III だけでは、“清楚”の意義素を弁別的特徴という観点から素描することはできても、他の単語の意義素とどの意義特徴の存在によって区別されているかという示差的特徴を見落とす可能性があるからである。本項では次の4種類の辞典をとりあげた。

- ① 《近义词应用词典》(略称を J Y とする) 语文出版社 1987
- ② 《反义词词典》(略称を F C とする) 黑龙江人民出版社 1988
- ③ 《汉语反义词词典》(略称を H F とする) 齐鲁书社 1986
- ④ 《新编多功能词典》(略称を X D とする) 国际文化出版公司 1989

これらの資料から作成した「“清楚”を中心とするシソーラス構成図」(【図2】)を通して示差的特徴を把握する見通しをつけることにする。

【図2】波線は動詞用法



【図2】からは、“清楚”が基本的形容詞であるため、“清楚”を置き換えに用いただけの語義解釈が多いことと、シソーラスの成員を“明白”“明確”“分明”“清晰”を含めた5個の単語にしほれば、ほぼ示差的特徴が得られるであろうという予測がたつ。

また、類義語を多くもつのは“清楚”の語義特徴グループのうち、<語義 III> だけであることもわかる。

そこでまず、意義素論における意味分析のための基本的な二つの作業原則に基づき、名詞を主語とし、シソーラス内の5個の形容詞を述語とする主述統合型（「SP型」と略称する）を用いて“清楚”の示差的特徴を考察することにする。なぜなら、形容詞の主語の位置に置かれた名詞は、形容詞の格の定義にしたがえば「判断対象格，評価対象格，描写対象格，経験者格，原因格」を担うものであり、語義の違いがストレートに反映されるからである。

意義素論における語義的意義特徴の分析は、

- （1）同位置の作業原則＝同じ自立語と同じ統合型・文型によって統合される自立語は同じ語義的意義特徴を共有する
- （2）相互呼応の作業原則＝互いに統合され得る自立語は、互いに呼応する語義的意義特徴を有する。

という2つの前提¹⁷⁾ を無条件に認めたうえで用例を分析して解決のいくちを見いだそうとする。以下のSP型における意義素分析は、この作業原則にしたがって行ったものである。

【“清楚”と“清晰”の違い】

口語と書面語という文体上の違いがもたらす、さまざまな文法機能の違いとなって現れる。“清晰”は重畳形をつくらず、描写を表示しない。述語補語構造の中で結果補語にならず（様態補語にはなれる）、変化の過程を内在させた性質を表示しない。言い替えるならば、現代語の判断形容詞としての基本的な文法機能のいくつかも欠けている

語彙の組み合わせも四字句“清晰可见”（くっきりみえる）など、他の類義語と文体レベルを明らかに異にするものがある。そこで、“清楚”の用法や語義を考察するための補助資料からは除外することにする。

【“清楚”と“分明”の違い】

“黑白”“公私”のように二項対立の主語がとれるかとれないかに端的に現れる。“分明”の意義素の内部には「はっきり別のものとして認識する」という「分ける判断過程」が含まれているために、二項対立の概念を評価対象格にとれると考えられる。それに対し、“清楚”では分け

るという判断過程が表示できないため、二項対立の評価対象格をとれないと考えられる。

また、“分明”に重疊形がないのは“分”という行為の結果，“明”という状態が生じるというV A型的な内部構造を有するためと考えてよいであろう。V 得A型には用いられるが、V A型では用いられないことが、上記の考察を裏付ける。本稿ではV A型の統合意義特徴の分析が主眼のひとつでもあり、“分明”を“清楚”との比較対象から除外する。

【“清楚”と“明确”の違い】

“明确”が「判断者が、その不鮮明または不安定な状態を一定の状態に確定できる事物」を判断対象とする点にある。すなわち、人間の意志によって鮮明度や安定度の変化をつけられないものや出来事は、“明确”の判断対象になりにくいいため、判断対象格を担う名詞が“态度”“目的”など精神行為が生み出すもの（以下、精神生産物と呼ぶ）に限られる。

それに対し“清楚”は、判断対象格を担う名詞を選定する時点（統合をつくる発話時点）において、「判断対象としてとりあげた事物と対比できる同種の事物が、先に発話された文脈や言外の発話場面に存在している状況」が背景にあるならば、（意義素論の観点では具体的比較基準^{〔18〕}が旧情報として存在しているならば、）その状況に支えられ、＜語義Ⅲ＞明確に識別され理解されうる性質を有する、という条件を充たす判断対象として認めることができるようである。

例えば、“这张画儿很清楚”が表示する統合意義は、“这张设计图很清楚”のそれよりは容認度が低い。しかし、古い文人画を見ながら「“字不清楚”だが、絵の方は（まだ）よく見分けられる。」と言おうとする状況を設定すれば、判断対象“画儿”と“字”の間に対比の文脈意義が生じ、“字”が具体的比較基準となり、容認度が高くなる。筆者は、このような「統合意義（ここではS P型全体の意義）が状況依存できる限界」を決定する要因の一つに、統合意義特徴が機能していると予測する。そこで、“明确”は“清楚”の語義文法両面において有用な比較対象になると考え、以下、“清楚”と入れ替えては考察対象として扱う。

【“清楚”と“明白”の違い】

“字迹”を主語にとれるかとれないかが両者の間の示差的特徴を端的に示している。“清楚”は知覚を通して区別さえできれば、その事物を判断対象にとりあげられるが、“明白”は「判断者が考えてみないと（思考期間を通らなければ）、その内容が理解できない事物」だけを判断対象にとりあげる。したがって“字迹很清楚”の統合は成立するが、“字迹很明白”は統合不成立になる。この示差的特徴は“清楚”より多くの限定を加えてイテアの範囲をせばめ、“明白”の意義素を“清楚”の意義素の下位に置くための特徴として、“明白”の意義素の方に含まれると考えられる。

上記の示差的特徴の分析を介して、意義素論の立場からシソーラスに関し、次の2つの比較的普遍的な言語事実が指摘できよう。

(1) 基礎的語彙を中心とするシソーラスにおいて、示差的特徴は周辺語彙の意義素に含まれる。すなわち、基礎的語彙であればあるほど、意義特徴の規定は少ない。

(2) 基礎的語彙は、その意義素が格を担う語彙に要求する弁別的特徴を、状況に拠る文脈意義（または場面意義）から補充できる可能性が高い。すなわち、その用法に典型的用法から周辺の用法へのバリエーションが多く存在する。

また、反義語を組み合わせて検討してみると、主語の位置に置かれる名詞が<語義Ⅱ>と<語義Ⅲ>とで異なることが、はっきり示されている。

【“明白” “（不）糊涂”と“清楚”のシソーラス】<語義Ⅱ>

形容する対象が「人格者の精神状態」であり、主語の位置にくる人間を表す名詞は、本来は感情感覚形容詞が要求する経験者格である。

この名詞が“清楚”の<語義Ⅱ>に呼応して統合するためには、「よく物事の筋道がわかる人格の持ち主」という情報を、その現象素の中に受け入れられる人間を表示せねばならない。

【“明确” “(不)模糊”と“清楚”のシソーラス】<語義Ⅲ>

“清楚”主語の位置にくる名詞は本来的な判断対象格を充たせばよく、「五感の働きに拠って他の事物との区別がはっきりつけられるような性質」を帯びている」という情報を、その現象素の中に受け入れられればよい。この<語義Ⅲ>には人間が思考能力を発揮して事物を区別するという過程が含まれないことが確認できる。

この“明确”についてもS P型を用いて意義素記述を行っておく。“明确”は“清楚”と比較すると、判断対象に極めて厳格な制限を有している。その弁別的意義特徴を意義素論の記述方法で表すと次のように記述できよう。

【“明确”の意義素内構造】

判断者	不定人称者
判断対象	何らかの目的を持ち、効果をあげることを意図する精神活動の具体的行為への反映の度合い
判断方法	帰属度スケールを用いて、行為に精神活動がどの程度正確に的確に反映しているかを判断する。
cf. 描写的な重疊形にはならない。	
判断基準	同一事物の「旧態基準」（以前はどうであったか）を優先的に用いる。 cf. “明确一点儿”は“写明确一点儿”のように、通常何らかの動作行為とともに用いられる比較表現である。
判断結果	他の同類事物とは鮮明に異なる、確定された特質が見いだされると判断する。

判断対象格は、「行為に伴う精神的活動に関する事柄」を表示する表現によって担われる。“態度”“目的”“計画”などがその典型であるが、意味的事項のうちの判断対象と比較してみるならば、内実を指すのにその器の名称を用いる「メトニミー表現」（帰属先を表現して、帰属内容を表す）が採用されているといえる。すなわち、判断対象格と判断対象の関係は、メトニミーという認知パターンで結ばれている。

5 V A 型，V 得 A 型，A 地 V 型の各共起制限の比較と，その文法分析

5. 1 調査資料の作成方法

《汉语动词－结果补语搭配词典》北京语言学院出版社1987の中から、基本用例を選び、15種類の複合統合型（リスト後述）について、以下のような置き換えが可能であるかどうかについて、インフォーマント調査を行った。

(1) “清楚”の用例18個と、その“明白”“明確”への置き換え

(2) “明白”の用例11個と、その“清楚”“明確”への置き換え

(3) “模糊”の用例3個と、その“不清楚”への置き換え

(4) “糊涂”の用例15個と、その内用例5個の“不清楚”への置き換え

以下“清楚：明白：明確”の3個の形容詞を“清楚”類と呼ぶことにする。

【用例調査に用いた15種類の複合統合型】

【述語結果補語V A統合型】

【V A 1】	S	V A	O
【V A 2】	S	V O	V A
【V A 3】	S	把 O	V A
【V A 4】		O	V A

【述語様態補語V得A統合型】

【V : A 1 / A' 1】	S	V O	V得(很) A / A A (=重畳形) 的
【V : A 2 / A' 2】	S	O	V得(很) A / A A (=重畳形) 的
【V : A 3 / A' 3】	S	把 O	V得(很) A / A A (=重畳形) 的
【V : A 4 / A' 4】		O	V得(很) A / A A (=重畳形) 的

【状語中心語A統合型V】

【A V 1】	S	A地	V(～) O
【A' V 1】	S	很A地	V(～) O
【A' V 2】	S	A A地	V(～) O

上記のローマ文字符号(V, A, O)に当たる単語またはフレーズについては、例文の中にアンダーラインをひいて、こちらで(V, A, O)のどれであるかを指示した。そしてまず、北京出身者2名にすべての用例チェックを依頼して相互の用例確認を繰り返したうえで、四川省出身者と山東省出身者に、その北京出身者の語感が最後まで食い違った用例を中心に、内省報告を求めた。なお、常套的用語法にしたがい、Sは主語、Oは賓語を指す。

インフォーマントへは回答の仕方について次のような指示を出した。

この形式で文ができるかどうかを、チェックして下さい。

- (1) ごく普通の表現として言い切れる(自分も使う)場合 → ◎
ある特別な文脈でなら使える場合 → △

かつ、特別な文脈や場面が理解できるように、
例文を詳しく書いて下さい。
 自分は使わないが、方言などで使うかもしれない場合 → ?
 文法的にも絶対こういう言い方はしない場合 → ※

(2) もし、意味上の目的語(=O)を取り替えたら使える場合 →
 O=他の目的語; と書いたうえで、
 例文を書いて下さい。

(3) A V 統合型では、V の後ろ(～)の位置に他の言葉をつけ加えると使
 いやすくなる場合、すべて例文を書いて下さい。

以上の手順で収集した 1700個の回答を、文法分析に有効な形で整理する
 には、まず動詞と形容詞の組み合わせに類別のあることが最も察知し易い統
 合型に注目することが効果的と予測される。そこで、一見していくつかのパ
 ターン分けができるのが【A地V型】であったので、【A地V型】内でどう
 使われているかをもとにして“清楚”と組合わさる動詞をおおまかに6種類
 に分けた。<>内は動詞、()内は【A地V型】についての特徴を示す。

①話すことを主体とする行為、<問, 打听, 讲, 说, 谈, 表达, 解释>
 (“明确地”のみ、ふさわしい賓語と一部共起)

②書く行為、<标, 抄, 写>
 (“～着” “～上”を付加して一部共起)

③五感を通して感じる知覚、<看, 听> (応答文で“清楚地”のみ)

④思考する精神行為、<记, 分, 想>
 (命令文で“清楚地记住”のみ)

⑤具体的動作、<点, 数, 算, 查, 洗, 印, 蹭>
 (原則として不可。1/4で“清楚地点”成立)

⑥代動詞が表す抽象的行為 <弄, 摸, 闹, 搞> (原則として不可)

この6種の動詞グループと“清楚”が構成する統合意義はそれぞれ、語義
 的意義特徴の違いと、三種類の基本統合型の統合意義特徴の違いを反映して、
 個性的傾向を示している。

本稿では紙幅の関係上、動詞のグループのうち、①「話すことを主体とす
 る行為」グループと“清楚”類“清楚”“明确”“明白”との統合のみをと
 りあげ、15種類の統合型の統合意義特徴を逐次考察していく。

5. 2 “問” “打听” への“清楚” 類の形容の仕方

話すことを主体とする行為を表す動詞グループはすべて継続動詞であり、統合形式によってゴール事点（一連の動作行為が完了するための条件，完了した結果などを示す）を特定されない限り，事柄としては果てしなく続き得る出来事を表す。ここで，「ゴール事点を決める統合」とは，数量時量補語，結果補語，方向補語など各種補語との統合を指す。

本項ではまず，“問” “打听” との統合を通して統合意義特徴を考察する。

内省報告の中で，両者の大きな用法の違いとして“明確地问”が賓語次第で成立するのに対し，“明確地打听”は成立しないという一致した報告があった。“打听”の語義的意義特徴として「答を求められる側には無関係の情報」を尋ねる（『小学館中日辞典』p258：“打听”は一般に聞き手とはかわりのない事柄を尋ねる場合に使われるのに対し，“問”にはこの面での制限はない）という定説があり，この語義的意義特徴が“清楚地”との共起を阻んでいると考えられる。この予想については§4 p34 の項で後述する。

“問” “打听” この2つの動詞の共通の意味を，意義素論の立場で記述するならば，

- ① 行為者の具体的動作は主に話すこと
- ② 未知の情報を相手から獲得するという目的意識をもっている
- ③ 相手に情報提供するように働きかける

という，3つの語義的意義特徴があげられよう。動詞現象素内の相プロセスとして表現しなおすならば，「意志的に働きかけを開始するスタート事点」から「（ゴール事点が設定されるまで）いつまでも話しかける流相」が続いていることになる。

動詞現象素内の格的要素は，第一次格として主語賓語で表される，「行為者」，「未知の情報を含む事物」，「（情報提供者としての）相手」があり，これらはすべて平相の段階（すなわち行為を開始する事点）で既に存在していて，どんなに“問” “打听” し続けても，その性質は変化しない。もし，変化するとしたら，相プロセスにゴールの事点が設定されて，異相について

の叙述が“问”“打听”に付加された場合である。

通常、「行為者」はS P型の主語の位置に置かれ、他の二つの格は述語賓語統合型（以下、V O型と略称する）の賓語の位置に置かれる。また、言語形式として表現されないまでも第二次格（現象素内からクローズアップされ、叙述を加えられる可能性のある事柄）として「情報獲得への要求」という、精神的原因と「行為者と相手の間でやりとりされる情報」「尋ねる手段」などが相プロセスに存在しうると予想される。

さてそれでは，“清楚”“明白”“明确”という形容詞は，おのこの，どの格的要素を形容対象として際立たせることによって，動詞と結びついているのであろうか？それぞれの意義素に違いがあるうえに，用例によって統合意義に違いがあることに注意しながら，用例の叙述内容を考察していく。

§ 1 : 【S V A O】統合型での“清楚”“明白”

“问清楚”と“问明白”を【S V A O型】内の同じ文法的位置（賓語OとしてS P型の統合意義を選ぶV A型の位置）で用いた，＜例1＞と＜例2＞の叙述内容と，その置き換え形式を比較した内省報告を整理すると，主に次のような直観的意味の記述にまとめられる。

＜例1＞你问清楚 他在哪儿住了吗？
 v a o

＜例2＞你应该问明白 他到底干什么来了。
 v a o

＜解釈1－2＞

☆ “问清楚”は「耳にしさえすれば，すぐ知識として獲得できる情報」

について尋ね，“问明白”は「聞いたあとで，行為者自身に何かを納得させるような情報」について尋ねている。

☆ “问清楚”の賓語部分を“在那儿住了没有”という反復疑問形式にしたほうがわかり易い，とする語感報告がある。“哪儿”という疑問詞が要求する情報内容より，反復疑問文が求めるイエスノーだけの情報の方が簡単明瞭であり，＜未知の情報の所在＞が明確だからであろう。

☆【V A 了 O 型】内の賓語を名詞フレーズに変換するならば、

“问清楚了”では“她的住处”が自然に選ばれるのに対し、“问明白了”では“她来的目的”という「考えざるを得ない内容」を選ぶのが自然な選択とされる。

☆“问清楚了”では例えば“她来的目的”という賓語をとった場合でも、「あれやこれや聞きだそうとする、知りたがりの聞き方」を表示するだけだが、“问明白了”では“她的住处”を賓語にとった場合には、動作主つまり質問者が「何か下心でもある心理状態」であることを、文脈依存意義として統合意義の中で表示する。

同一の【S V A O】統合型を用いて、このように統合意義に差異が生じるのは、“清楚”と“明白”の語義の差異が反映しているからである。

そこで、【図 I】p13 で考察した“清楚”の<語義 I>～<語義 III>の内、どの語義が“问清楚”の統合で表されているかを明かにしたうえで、次の手順を踏んで“清楚”と“明白”が“问”の現象素の中からどのような判断対象をクローズアップしているかを検討せねばならない。

- ①【V A 型統合意義特徴 V】p12 により、相プロセスのどこかに形容詞の判断対象になるような一定方向の変化を示す事物が存在していないか？
- ②【V A 型統合意義特徴 II】により、“问”という継続動詞に統合型によるコール事点が設定されているので、動作開始以前（平相）に存在する事物が動作終了後（異相）で、その動作から自然な影響を受け「穏当な変化」を生じていることはないか？

この検討をすませた後、統合意義特徴の検討にはいらねばならない。

まず、行為者（質問者）の理解能力も、相手（回答者）の説明能力も、質問し続けたからといって、成りゆきで自然に向上するものではない。ただ、「未知の情報を含む事物」の中の「情報の未知度が了解度へとベクトル量の変化」を示すだけである。この未知の程度そのものは、言語形式化されることのない第二次的格要素「やりとりされる情報」に帰属している。すなわち

動詞の第一次格（主語，賓語の位置にくる格）として言語形式化された，例えば“她的住处”が内包する地名番地風景産業などの情報であり，形容詞の判断対象格と判断対象との関係によく現れる「事物の名称を用いて，事物の特質を表す」メトニミー表現で示された情報に属している。そこで，“清楚”と“明白”とでは，この「やりとりされる情報の性質」に違いがあるという予測がたち，賓語から受ける語感の違いにそれが反映していると考えることが出来る。

【図Ⅱ】p15 から考察した“清楚”と“明白”の示差的意味特徴から語感の差異を説明することができる。すなわち，“问清楚”の対象となる情報が単純で知覚を通してすぐ理解できるほどの「理解しやすさ」を備えているのに対し，“问明白”の質問の対象は情報として理解するために相当の思考力を用いて何とか理解できるような「複雑さ」を備えているという違いがある。

それと同時に，異相で了解度の高さに到達するために流相で行われるであろう尋ねる手段，つまり「質問の仕方」にも両者には差異が生じてくることになる。“问”が行為の動機として有している「情報獲得への要求」も，異相の状態としては，“清楚”が「行為者の知識量の増大」で目的達成とするのに対し，“明白”では「行為者の理解度納得度の深化（精神行為）」をもってよしとすることになる。

以上の検討を経て，“问清楚”の統合における“清楚”が表す語義を意義素論的立場から記述すると，「流相についての表現では，＜目的達成のための方法＞を形容する＜語義Ⅲ＞」「異相についての表現では，＜質問で得た理解＞を形容する＜語義Ⅱ＞」が選択されていることになる。

§ 2：文の意味と“问清楚”“问明白”の統合意義

こうして見いだした【SVAO】統合型内での形容対象に対して，直観的な意味記述をふたたび照らし合わせて考察し，“问清楚”“问明白”の統合意義が流相の表現か異相の表現かを用例ごとに確認する必要がある。

そこで筆者はインフォーマントに対し，自覚的に意味の区別を報告しても

らうために、「質問の仕方（流相）について述べていますか？」「回答を得たあとの理解度（異相）について述べていますか？」という誘導を行った。その結果，“问清楚”の統合意義については、「質問の仕方」を述べるか、「質問者の理解度」を述べるかは、文脈によって、つまり複合統合型のタイプによって決定される」ことが判明した。以下、文脈依存意義がどの統合形でどのように含み込まれるか、特に【VA型】と【V得A型】の用法を比較検討し、文の意味が統合意義にどう影響するかを考察していく。

【命令文】

まず、命令文の叙述内容を表す場合、優先的に「質問の仕方」が選ばれる。その理由は，“清楚”の【語義Ⅰ】【語義Ⅱ】は「命令を受けて意志的に変化させることができない」属性（理解能力が高い）や性質（人間が正確に理解できている状態）であり，【語義Ⅲ】のみが行為対象しだいでは，意志的に変化を生じさせることができるためと考えられる。すなわち，「命令」という言語行為：陳述」を発話行為の目的とする，文全体の意味が【VA型】統合意義の中に文脈依存意義として共起しているためと説明できよう。

<補充：1-1> 请（再）问清楚一点儿！

（もっと（回答者に）よくわかるように聞いてください。）
 ……cf. 記者会見の席上で，司会者から質問者への要求など。
 話し手（＝“我”）が相手（＝“你”）が話し手以外の第三者，
 ＝“他”）へ「すでに質問した仕方」に対して，「今度は…」
 という注文を出す場面が想定されやすい。

また，「VA 一点儿」という比較形式の統合を一つの文（最大複合統合型）ともなす場合には，命令ムード自体が「文に伴う陳述」として統合意義特徴に加わっているとみなすことになる。しかしその場合でも，“清楚”の比較基準が，「前の状況で質問行為を行った時の尋ね方の“清楚”の程度」（旧態基準）であること，例えば，相手にとって分かりやすいように筋道だてて尋ねたか，あの手この手で質問の意味が分かりやすいように尋ねたか，などは，場面依存意義（言語化されていない情報）として含まれている。

<補充：1-2> 请（问问题）问得清楚点儿！

（もっと（私に）よくわかるように聞いてください。）
 ……cf. 記者会見の席上で，回答者から質問者への要求など。

原則として、尋ねかけられた側(=“我”)が尋ねてきた相手に対して注文をだしている場面が想定される。

“问得清楚点儿”の内省報告を“问清楚点儿”と比較すると、「話し手が“问”される行為対象として意識され易い」以外は、ともに「行為の仕方」についての要求を出すことで共通点がある。【V得A型】では形容詞の語義の中で、最も多用される本義が優先的に選ばれる(【V得A型統合意義特徴II】⁽¹⁹⁾)ので【語義III】がクローズアップされるのが基本的用法であるが、【VA型】に比べると動詞の独立性が高く、その動作主と同時に動作対象、“问”であるならば共役者である回答者の存在が意識され易いと予測される。上記の内省報告は、これらの文法的機能が共鳴しあって生じたと考えられる。

“清楚地问一下!”は不成立であるが、その理由は“明确地问一下”と比較しつつ後に検討する。

【平叙文】

次に平叙文での“问清楚了”“问得清楚”について検討する。

前者は、話し手(=“我”)第三者(例えば“他”)を行為者とする場合、ともに「質問することによって問題となった内容の全体像がよく把握できた」という異相の状態のみを表す。

聞き手(=“你”)を主語とした場合も同様に異相の状態のみを表すが、言い切りの平叙文の形式(=最大叙述内容)を形成するには、次のように文脈意義を補充することが望ましいようである。面前に居る相手に向かって、相手よりも自分の方が「相手に関する情報量」が多い、または確かであるような優位にたつ表現を避けようとする、交際上の配慮が働くためであろう。

<補充:1-3> 你(把/问)这个问题问清楚以后,再来跟我商量。

(この問題を誰かに尋ねてちゃんと理解したうえで、私に相談にいらっしやい。)

你问清楚了?(上昇イントネーションによる疑問文)

(質問してよくわかった?)

それに対して“问得很清楚”は、「質問することによって問題となった内

容の全体像がよく把握できた（知識量が充分になった）」という異相の状態の他に、「質問を相手が理解しやすいように上手に行った」という流相をも形容対象とする。かつ、この二つの統合意義のどちらが選択されるかは前後の文脈によって決定されるという、内省報告が一致してなされた。

ただし、どちらが典型的な表現として意識されるかについては、インフォーマントによって、流相の形容がより典型的な表現だとする語感と、異相の形容表現の方が多用されるという語感に分かれた。現象素論の視点から見れば、この語感の違いは、「V得」の表す事柄（以下、「行為範疇」とも呼ぶ）としての“問”の現象素（【V得の文法的意義特徴】参照⁽¹⁹⁾）がクローズアップされるのか、「“問”の行為者」を表す（主語の位置に置かれた）言語形式の現象素が、「“清楚”の経験者」としてクローズアップされるのか、という違いとして解釈できる。（【V得A型統合意義特徴Ⅰ】参照）

筆者の解釈としては、【V得A型】が【VA型】に対して有する最も際立つ示差的特徴は、「V得」を独立した形容対象としてクローズアップできる点にあると考える。この統合意義特徴を有するゆえに、行為者の格を充たしていたはずの現象素に、さらに形容詞の経験者格を充たさせて、二つの現象素枠を連結した複合現象素（複合統合型として言語化される）を構成できると考える。したがって、【V得】が継続動詞の行為範疇（事柄）である以上、理論的には流相が異相よりも優先的に形容対象としてクローズアップされるのではないかと考える。この問題に関しては、より多くのデーターを収集して検討したい。

§ 3：“問胡塗”の統合意義を通して考察する“把”統合型の3パターン

“問胡塗”は、行為が導く穏当な変化を表してはいない。つまり、“問”しても“清楚”の状態にはならず“胡塗”になることを表すVA型は、通常の相プロセスに反する「非典型的なVA型」である。こういう統合意義の特殊性は“問胡塗了”の使える統合型が、介詞“把”を含む統合型【VA3】（S把OVA）（【“把”統合型】と略称する）と【VA4】（OVA）に

において“O”が“清楚”の経験者である場合に限られることに反映していると考えられる。そこで，“把”統合型の統合意義特徴について考察し、今後の統合意義特徴の分析に役立てることにする。

<例3> 我不知详细情况，他猛地一问，真把我 问 糊涂了。
_{0 v a}

私は詳しい状況を知らないのに、彼がものすごい勢いで質問してくるものだから、どう答えたらいいか、分からなくなった。

<補充：3-1> 使役動詞“催”“支使”・感情的行為動詞“笑”“哭”と
 “糊涂”との統合

☆ 别催他了，再催就把他 催 糊涂了。
_{0 v a}

もう彼をせっつくのは止めなさい、これ以上せっついたら彼は、どうしたらいいかわからなくなるから。

☆ 保姆叫主人给 支使 糊涂了，简直不知怎么办好了。
_{0 v a}

お手伝いさんはご主人にアレヤコレヤ使われてボーっとしてしまって、全くどうしたらいいものかわからなくなっている。

☆ 我一进门，大家都笑了起来，一时把我 笑 糊涂了。
_{0 v a}

私がドアをはいったとたん、みんなが笑いだしたので、私はすぐにはワケがわからなかった。

☆ 这孩子哭泣来没完，真把我 哭 糊涂了。（別のタイプあり）
_{0 v a}

この子は泣き出したら止まらなくて、ほんとに手がやける。

<例3><補充：3-1>で用いられた“～糊涂”という統合は、より大きな複合統合型のうち、

【(Ns) 把 O (=「人間」) V A】型、

【O (=人間) 被 V A了】型

の2種類の統合型でしか使われない。これらの複合統合型の中では，“O”と“A”との間に、「経験者（以下，Ns2 とする）と，その感情」という第一次格関係が存在する。

また、統合意義全体から次のような行為・出来事の連鎖が見いだせる。

- ① 行為者が相手に対して（または行為を行う現場に居合わせた人に向かって）…… “Ns” が “Ns2” に向かって
- ② 自分の行為を「過度に行い続ける」ことによって、…… “V” 継続
- ③ 相手（または居合わせた人）が「精神的にこのもしくない感情；状態」に陥った。…… “Ns2” が “A” の状態になる

こういう出来事の連鎖は、行為者自身の意図とは無関係のまま、行為を受けた相手、またはその場に居合わせた人、時に行為者自身が抱いた「相手の行為に応じようとする義務観念」「その場にふさわしく行動しようとする適応意識」が、引き起こした行為の連鎖（アクションチェーン）と解釈できる。

ては、文法概念として、出来事連鎖とはどう位置づけられるのか？

本稿で用いる「出来事」という概念を現象論・認知言語学的観点から定義するならば、「叙述時点と叙述地点を特定されていることで一つの認識の場として枠付けされた状況」の中で「発現した事柄」のことである。

また、「状況」とは、内部に多くの出来事や状態を含みながら、めくり絵絵本の中のページのように、「叙述時点の変化に伴って枠付けを変えていく個々の認識の場」とも定義づけられる。先に紹介した理想認知モデルに段階をつける観点にたつならば、状況は相プロセスよりも一段うえの、より広い、またはより背景的な情報の集合体である。

そこで本項では、通常の“把”統合型とは異なり、賓語にAの経験者格を担わせる【（Ns） 把Ns2 V A】統合型の統合意義特徴を、こう規定する。

【（Ns） 把Ns2 V A】統合型の統合意義特徴 【現】

- （1）同一状況で発現した出来事とおしを、相プロセス内には存在しない“他人の行為への常識的反応”や“事のなりゆきから生まれる生理現象”を判断根拠として、因果関係で結ばれた出来事として、言語化する叙述力を有する。すなわち認知過程を表示する。

- （2）＜動詞が行為動詞である場合＞

行為者の行為の相プロセス内に存在する格的要素をクローズアップ

して形容詞の形容対象とする他に、状況内に存在する「他の行為関連者」も形容対象にクローズアップする現象枠連結機能を有する。

この“把”構文の統合意義を、その中に含まれた【VA】型の統合意義から捉えなおしてみるならば、より大きな現象素枠を表示する【(Ns)把Ns2 VA】統合意義全体に対する一部分として、次のような文脈依存意義を取り込んでいると予測できる。

- (1) 動詞の指示する相プロセスでは表しきれない、「状況内の出来事が結ぶ因果関係」を受け入れて、
- (2) その因果関係を体現する、有意志の行為者と無意志の（感情や状態の所有者である）経験者とを別別に捉え、
- (3) 経験者に好ましくない感情や状態が生起したこと」を表示する

この【(Ns)把Ns2 VA】統合型では、動詞として生理的变化を表す自動詞・形容詞を選ぶ用法もある。例えば“吓”“累”と“糊涂”を組み合わせた“吓糊涂了”“累糊涂了”などである。その場合“把Ns2”の“Ns2”は、生理的变化を示す経験者であり、“把Ns2”の前位置（主語）には別の行為者や行為が置かれるのではなく、生理的变化を極限にまで達するものにした原因が叙述される。

また、この生理变化を表す【VA了型】は、

- ①【(Ns)VA了 O】型で、“O”の位置に経験者を置ける。
- ②【O VA了】型として、“O”の位置の経験者についての、生理的な極限状態の描写とすることもできる。すなわち“被”を必要としない。

<補充：3-2> 自動詞・形容詞が生理的变化を表す場合

☆ 这件事把他吓糊涂了，他连一句话都说不出来了。
o v a (驚いてアッケにとられた)

☆ 这些日子可把我累糊涂了。
o v a (疲れはててボンヤリした)

☆ 这儿几天工作紧张得很，都把他忙糊涂了。
o v a (忙しくてボーとなった)

“把”統合型と【V A型】の複合統合型にはもう一つのパターンがある。

<補充：3-1>で「動詞が行為動詞である場合」の用例に挙げた“哭胡涂了”には、上記の「自動詞・形容詞が生理的変化を表す場合」のV A型と、一部分異なるだけの、もう一つのタイプの用法がある。すなわち、意味的には“O”自身が動作主でもあり、経験者でもある統合意義を表し、かつ、これまでの2種類の“把”統合型とは異なり、“把O”の前には動作主を表す言語形式が置かれない。ある人物がなぜ或る行動をとって“胡涂”の状態に陥ったか、という原因を表す表現が置かれる。

また、【“把”(Ns=N s2) V A】型の他には、【(Ns=N s2) V A了】型でのみ使われる。この用法では、【(Ns) V A了O】型での統合は成立しない。

<補充・3-3> “把”の賓語が，“V”の行為者兼“A”の経験者である場合

☆ 连续考了一个星期，都把他 考胡涂了。
_o _v _a (彼は試験ボケした)

☆ 连续三天的高烧，都把他 烧胡涂了。
_o _v _a (彼は高熱で意識が混濁した)

☆ 听了儿子那几句不近人情的话，真把父亲 气胡涂了。
_o _v _a

(父親は怒りで我を忘れた)

こういう用例は、【(Ns) 把O V A】統合型の統合意義特徴の固定特徴とみなせる「状況内の因果関係を見いだして言語化する叙述力」を、出来事と接続して認知する枠組みに用いた、文法的には周辺的な用法とみなせる。すなわち、“把”字句の接続詞的用法とも見なせる。また、典型的な統合型が表す事実関係を認識方法に投影したメタファー用法とも解釈できよう。

以上、<例3> “问胡涂”に関連する分析はすべて【非典型的V A型】を対象としたものであり、【典型的V A型】には、あてはまらない。相プロセスの中で穏当なベクトル値の変化を表す典型的V A統合型は、“把”構文の中で不如意なニュアンスが加わることがない。また、“把”の賓語の位置に形容詞の経験者が置かれるという、接続詞的用法(因果関係)をも生じない。

ところが上記の【VA型】が“把”統合型に包接される用法は、【非典型的VA型】【典型的VA型】における動詞と形容詞の組み合わせ、および双方のニュアンスが、【“把”No V得A型】へと変換できる。したがって、これだけの言語事実では【VA型】と【V得A型】の違いを具体的に取り出すことができないとはいえ、「【V得A型】の統合意義特徴が【VA型】とは異なった認識の角度から因果関係をとらえている」ことは確認できる。

異なった言語形式がもし一時的に全く同じ意義を表示する時期があったとしても、言語活動を支配する経済の法則からみて、どちらか一方はその意義を変質させるか、消滅させていくことが、歴史言語学の常識だからである。稿をあらためて検討したい。

§ 4 : “明确地问”と【A地V型の統合意義特徴Ⅲ】

次に、“問”と“明确”が【A地V型】の中でのみ結びつくということについて考察する。本稿でのこれまでの類義語の分析から、“明确”の語義は「人間の意志によって鮮明度や安定度の変化をつけられる“精神生産物”」を形容するものと認められた。また、“問”という行為には、「よりよい情報を獲得するという目的意識」が含まれていると認められた。

しかし、“問”の「目的意識」の中には、「回答としての情報を他の情報と区別された、確定的なものにする」という要件までは含まれていないと考えられる。もし含まれているのならば、“明确”は【VA型】【V地A型】すべてで“問”と共に起して、“問”の現象素内の相プロセスのどこかをクロースアップして、形容できたと考えられるからである。

<例4> “我明确地问了她来的目的，她也明确地回答我了。

(私は、何が聞きたいのか焦点をさだめて彼女の訪問の目的を尋ねたし、彼女もきっぱりと曖昧さを残さず私に答えた。)

cf. “我问的方式” “她回答的方式” という、行為者の技術について“明确”と判断していると解釈できる。

この<例4>では、“清楚”も“明白”も“明确”と置き換えることができない。それは、“問”する以上、行為者すなわち話し手の側には、「確か

な情報のないこと」が前提（平相の状態）であり、話し手が“清楚”の経験者になれる，すなわちに具体的に情報を了解しうる状態が“問”する時に存在していない，すなわち流相の状態として成立する条件がないためと考えられる。また，異相でしか成立しない状態は【A地V型】内の形容詞では表現できないことも再び確認できる。

ただ，第一印象としての語感では，“明白地问”が「隠し事のないズバリとした聞き方をした」様相を表すかのように感じられるという。つまり聞き手の目からみて「聞き手が聞いて，その質問内容をすぐ理解できるような聞き方」をされたと感じるらしい。それは【A地V型】の表現を聞いた場合，状語になる形容詞の語義が人間に関するものであれば思わず判断対象として人間を想起するからであろう。ところが，「何が？誰が？“明白”なのか？」という質問で確認をとろうとすると，インフォーマント全員が，「よく考えると，妙な表現だ」と報告しなおしてきたのは，内省報告をする際には聞き手の立場からの第一印象まず浮かび，その後に話し手の立場にたった立場からの内省がおこなわれ，時にその両者に食い違いがおこることを示している。

また，この<例4>で“問”と“打听”の入れ替えができないのは，回答者側に詳しい情報を与えるという能力がないと予想する尋ね方，すなわち，回答者とは関係のない情報について尋ねるという“打听”の尋ね方が，“問”との示差的特徴としてクローズアップされているためと考えられる。つまり，“明确地问”が間違いなく使えるのは，【A地V型】の表す認知過程により，質問という行為が行われる状況の中に「質問を通して確定した状態へ変化し得る回答（精神的生産物）を入手する」という行動の方式を見いだせるからと考える。言い替えるならば，“明确地问了”は，動詞“問”の相プロセス（【“問”A型】【“問”得A型】の統合意義特徴が示す）の内部から離れ，状況全体（この場合は，“問了”という出来事の発現（事実をなった）時点での「一次的安定状態」）を俯瞰して，その中から“明确”が「行為者の質問方式」を形容の対象として見いだし得るためと考える。

上記の検討を通して，本稿では【A地V型】の統合意義特徴Ⅲ^{（20）}として次の規定を認めることにする。

【A地V型統合意義特徴Ⅲ】【現】

状況全体の有り様について、その状況が成立する時点（過去，現在，未来）において存在した，存在している，存在しうる

- ① 動作行為（ex. 事実として発現している行為，実現への意志）
- ② 過程（ex. 同一状況内での事実継起，因果関係）
- ③ 状態（ex. アスペクト助詞“着”が指定する流相，異相）

これらについて、それを構成する各現象素の中から、形容対象として形容できるものを見いだして形容する。しかし、その形容対象を新たな現象素としてとりだして、言語形式として表現することはない。

5.3 “讲”“说”“解释”“谈”“表达”への“清楚”類の形容の仕方

次に“问”とは異なり、情報が行為者の側に属している「話す行為」として、“讲”“说”“解释”“谈”“表达”の用例の用例を取り上げる。

§1：動詞の賓語と【A地V型】

“讲”と“说”とは「筋道だてて話そうとするかどうか」に示差的意味特徴があるとされ，“解释”は行為目的が「人に好意を抱かせるように説明すること」にあり，“谈”は「行為者が複数であること」に介別の特徴がある、と従来認められてきた。“谈”は主語の位置にくる行為者が単数の場合、述語“谈”との文法的共起制限により、介詞構造（“跟”“同”など）を用いて共役者を言語化しなければならない。“谈”は人間どおしの精神的共同作業と認められているといえる。この4動詞の語義的意義特徴の区別は，【VA型】【V得A型】【A地V型】の統合型構成に直接的には影響していないようである。すべてゴールのない継続動詞であり，相プロセスのありかたが似ていることに原因があると思われる。むしろ，今回，統合意義特徴のパターン分けを示す形式として注目した，【A地V型】内での形容詞との統合についてその用法を区別するキーワードは，動詞がとる賓語それも形式的に動

詞の後ろに置かれているのではなく、意義素の第一次格としての判断対象，
を表示する名詞の違いである。＜例5＞～＜例10＞に，形容詞の側に重点を
おいてその組み合わせの違いを列挙する。

これら“讲”“说”“解释”“谈”4つの動詞と異なり“表达”は，【A
地V型】内で，“明确”“清楚”“明白”すべてと統合する。＜例11＞

その原因は，“表达”という弁別の特徴が，「その賓語の位置に置かれる
言語形式が，その行為の過程に沿って生み出されていく精神的生産物である」
と規定されているためと予測される。§2＜例14＞でも取り上げる。

以下，上記のような用法の違いに注目して，“清楚”類の意義素および統
合意義特徴について考察を進める。

＜例5＞你先把你的理由讲清楚了。
o v a

＜例6＞不是老师没讲明白（情况／道理），而是你没听明白。
v a o

＜例7＞他把事情的经过一五一十地都说清楚了。
o v a

＜例8＞因为她没把话说明白，所以大家都误解了。
o v a

＜例9＞你把事情解释清楚了，大家就不会误解了。
o v a

＜例10＞这件事你先跟我谈清楚就好了。
o v a

＜例11＞他的想法很难用一两句话表达清楚。
o v a

【VO型での賓語の違いと，A地V型での“清楚”類】

① “（你的）理由” → “清楚／清清楚楚地讲一下”（“把”字構文で安定）

＜補5-1＞ cf. “（很）详细／详详细细地讲了一遍”
（理由を事細かに（詳しい内容を）話した）
動作そのものの綿密さを形容する“仔細”は“讲・说”
など，実行過程が単調な言語行為とは【A地V型】の中
では結びつかない。“看”“聽”などとは【A地V型】
統合型内で統合できる。

② “道理” → “很明白／明明白白地讲了一遍”

<補6-1> (疑う余地なく、すぐ納得できるように話した)
<補6-2> 他又很明白地讲了一遍道理，我才总算听懂了。

③ “事情的经过” → “清楚／清清楚楚地解释一下（吧）”

<補 7,9> (筋がよく通った、理解し易い説明のしかたをしてほしい)
→ “很明白／明明白白地说了一遍”
cf. “(很)详细／详细地说了一遍”

④ “这件事” → “清楚／清清楚楚地谈一下（吧）”

<補10> <例5>と同じく、話す内容（話す方式）が事細かであることを表す。

①～⑤の用例では、おのこの使える動詞と形容詞の組み合わせが限られるが、“(很)明确地”だけは、上記の實語にさらに⑥“自己的观点”⑦“那兒的情况”を加えた【VO型】に対して、すべて状語【A地】として結びつけられることが確認された。ただし、統合される動詞は“V了一遍”という統合より、“V一下”（命令の伝達ムードが加わっている場合）の形式が選ばれやすい。内省報告では、いちばん想定しやすい発話場面として「契約を結ぶために説明をする場面」が全員から報告された。

また、文脈的意義の補充があれば、“清楚”が【A地V型】の實語としての“这个词”と統合するという用例も、若いインフォーマントから報告された。動詞が“说”ならば発音の明瞭さを表示し、“解释”なら説明の明瞭さを意味するという。

<例12> 第一遍没说清楚，→→ 他又清楚地说了／解释了一遍这个词。

（動作が一連のものであることを、文脈意義で補充する）

しかし、この用例は世代間の語感の違いが現れた用例と解釈せねばならない。なぜなら、若い北京出身者が使えるとしたムキ身の“清楚地”と、“这个词”との統合は、初見の用例調査では、他の3人の年配者すべてから、「使わない」と報告され、<例13>のように文脈意義からの補充が加わった例を示しても、「やはり使いにくい」としたからである。

また、“清楚”が伝達ムードの加わった“V一下（吧）”となら、“V了

「遍」とよりも【A地V型】で継続動詞と結びつくことについては，“清楚”の＜語義II：了解している＞ことと“詳細”との語義分担があるためではないかと予測する。前項で検討した命令のムードとの共起が，両者の語義分担をより明確にしていると考えられるからである。

§ 2：“明確地”と思想的な生産行為動詞

これら“清楚”類の形容詞の中で最も特徴的な用いられ方をしているのは“明確”である。“明確”は，本稿がとりあげた6種類の動詞グループの内，“話す行為”を表す動詞類と“書く行為”を表す動詞類とだけ統合する。

このことは，本稿が2.2項で，“明確”が形容する対象を「人間の意志によって鮮明度や安定度の変化をつけることのできる，精神行為がうみだすもの（精神生産物）」としたことを裏付ける。話す行為がきわめて精神的行為であることはいうまでもないが，書く行為も「生産物（行為を経て初めて存在するようになる，異相での格要素）」すなわち“字”や“文章”な思想的作品を生み出す行為であり，その作品は書き手の思想や感情を内実として表すものだからである。本項では，まず，話す行為と“明確”が表示する判断（評価）との統合について検討していく。

- ① 動詞が表す行為の相プロセスそのものに，ある精神的価値が作り出されて確定していくという「価値の確定へのベクトル値」が伴わない場合，“明確”は【VA型】内で動詞と統合することがないと解釈される。（本稿2.3，【VA型の統合意義特徴V】より）

☆ “明確”が【VA型】内で持ちいられる用例はつぎのようなものである。

<例13> 你的打算（計劃）先跟我談明確就好了。

（あなたの計画については，まず私と話しをつけてくれたほうがよい。）
cf. “打算”など人と相談して決定することを前提としている思案についてならば“談明確”が成立する。

<例14> 他把自己的想法表达明确了。

cf. “表达”は，「行為者自身の思想や感情を表現する」ことが語義的意義特徴なので，“表达”すればするほど思想や感情が“明確”に変化するというベクトル値が“表达”の相プロセスにそって現

れる。表現の個別化や具体化が進むことは、そのまま思想や感情が「確定していく道のり」とみなされるからである。

それに対して，“说”“讲”“解释”などはいくら話し続けても，その行為自体には「思想を明確に確定する」という効果が相プロセス内では保証されていない。したがって，“说明确”“讲明确”“解释明确”は通常，成立しない。

6 おわりに

“清楚”類の関わる統合意義特徴についての総論は，動詞の残りの5グループとの統合を検討し終わった後で出すのが当然かと考える。紙幅の都合上，本稿はこの研究の第一段階を概観したに留まった。

注

- 1 大滝幸子1995 「述語補語統合型の統合意義特徴－動詞と形容詞との組み合わせを対象として」東洋文化研究所紀要第128 冊pp1-62
 ――1996 a 「状語中心語統合型の統合意義特徴－形容詞と動詞の組み合わせを対象として」東洋文化研究所紀要第129 冊pp1-62
 ――1996 b 「判断形容詞と動詞とが組合わさった統合型の統合意義特徴の分析」東洋文化研究所紀要第131 冊pp117-181

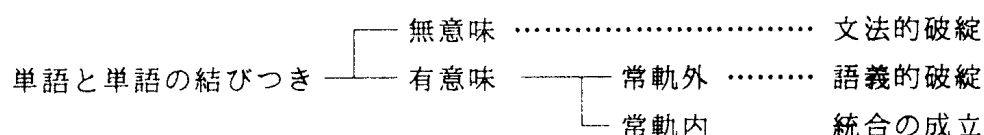
2 インフォーマント紹介

北京出身者：楊光（男性，1968年生）蔡曉軍（女性，1956年生）

山東省出身者：管玲（女性，1954年生）

四川省出身者：王岳川（男性，1955年生）

- 3 “洗脏了”は第一印象として洗濯に使った水についての変化が想起され，“洗湿了”はまず洗濯をしている人物の着衣や履き物についての変化が想起される。こういう言語事実を本稿では，“述語の統合意義のなかに，主語によって表示される語義が文脈依存意義として含まれている，または慣習として統合意義に添加されている」と解釈する。
- 4 「単語と単語の結びつき」が使えるとされる場合すなわち＜有意義な結びつき＞と認められるためには，文法レベルと語義レベルで次のような条件を有するものと想定できよう。



本稿の研究テーマである統合意義特徴の記述のためには，使えない理由が語義レベルにあるか，文法レベルにあるかを判別したうえで，文法的意義特徴として独自の規定内容を抽出することが必要である。

- 5 本稿で参照した認知言語学の解説書，論文集は以下の通りである。

George, Lakoff. 1987

Women, Fire, Dangerous, Things The University of Chicago Press

（池上嘉彦，河上誓作ほか訳1993.『認知意味論』紀伊國屋書店）

Langacker, Ronald, W. 1986. “An Introduction to Cognitive Grammar.”

Cognitive Science 10: pp1-40

— 1987. *Foundations of Cognitive Grammar* vol1(Theoretical Prerequisites)

1991. *Foundations of Cognitive Grammar* vol2(Descriptive Application)

Stanford: Stanford University Press

1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*.

Berlin and New York: Mouton de Gruyter

河上誓作編著1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版

池上嘉彦ほか訳1998. 『認知言語学入門』大修館書店

(Friedrich Ungerer & Hans-Jorg Schmid 1996.

An Introduction to Cognitive Linguistics: Copyright by Addison
Wesley Logman Limited)

辻幸夫訳1996. 『認知言語学のための14章』紀伊国屋書店

(John R Taylor 1989, 1995. *Linguistic Categorization*: Oxford University)

- 6 ゲシュタルト心理学の主要な主張は、「ゲシュタルト知覚は知覚機構化に関するゲシュタルトの法則（ゲシュタルトの原則）」としてまとめられる。

①近接の原理：わずかの感覚でしか隔てられていない個々の要素は、何らかの形で相互に関連しあっているように知覚される。

②類同の原理：互いに類似する個々の要素は、同一の切片として知覚される。

③閉合の原理：知覚的な機構は閉鎖された図形を基本とする。

④連続の原理：断絶がほとんどないような一連の要素は、まとまった全体として知覚される。 (池上ほか1998: p44)

Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophical Investigations*. New York:
Macmillan (「哲学的研究」法政大学出版局)

Austin John L. 1961. *Philosophical Papers*. Oxford: Oxford Univ. Press

Lakoff, George. 1977. *Linguistic Gestalts*. In *Papers from the Thirteenth
Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, pp236-87

Tversky, B., and K. Hemenway. 1984. *Object, Parts, and Categories*.

Journal of Experimental Psychology: General 113: 169-93

- 7 本稿で参照した意義素論と現象素論の研究書、論文集は以下の通りである。

服部四郎1953 「意味に関する一考察」言語研究22/23号 日本言語学会

1960 『言語学の方法』 岩波書店

1968 a 「意義素の構造と機能」言語研究45号 日本言語学会

1968 b 「意味」岩波講座哲学11言語 岩波書店

1974 「意義素論における諸問題」言語の科学第5号東京言語研究所

国広哲彌1967 『構造的意味論』三省堂

1970 『意味の諸相』三省堂

1982 『意味論の方法』大修館書店

池上嘉彦1975 『意味論：意味構造の分析と記述』大修館書店

国広哲彌1994 「認知的多義論－現象素の提唱」言語研究106号 日本言語学会
現象素論を提唱して、「外界を認知する体系」についての記述を

多義語の構造の記述に用いた論考

1985 「認知と言語表現」言語研究88号 日本言語学会

池上嘉彦1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

場所理論を活用して、「変化と状態、行為と運動などの認識パターン」の概略を述べた論考

- 8 意義素論において意義素記述に用いられた文法的意義特徴の例。

國広1982: p277,299

ト: < [[P₁] ト [P₂]] 時制辞 > 文法的特徴

< 命題P₁とP₂を同じ資格のものとして結ぶ >

< P₁P₂は時間的に前後して起こり、統一的関連性で結ばれている >

トキ: < [S₁ トキ] [S₂] > 文法的特徴

< S₁の時とS₂の時が同時である >

なお、Sは時制辞を含む。Pは真偽の判断をくだせる命題であり、命令要求決意を含まない。

- 9 本稿で参照した形容詞に関する研究書、論文集は以下の通りである。

朱德熙1956 「現代漢語形容詞研究」《語言研究》第一期

大滝幸子1992 「“人間を形容する形容詞の意義素記述”における日中対照研究」
明海大学外国語学部論集第5集pp65-80

形容詞を分類し、それぞれに格をたてた。

判断形容詞と判断対象格、描写形容詞と描写対象格、感覚形容詞
感情形容詞と経験者格または原因格

— 1996 c 「時間と距離に関する中国語形容詞の意味分析」

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第1輯pp1-36

【“很”の文法的意義特徴】を、「比較方法を用いずに、それぞれのスケールのどこに帰属するかについての判断（帰属判断）を下す」（叙述）とした。

陆俭明1990, “VA了”述补结构语义分析《汉语学习》第1期 pp1-6

崔永华1982, 与褒贬义形容词相关的句法和词义问题《语言学论丛》第9輯pp96-121

原由起子1989 「程度副詞“很”と状語の關係について」

姫路独協大学外国語学部紀要第2号pp173-190

- 9 大滝1996 c (注4) 参照

- 10 陆1990, 崔1982に成員リストがあり、多少の異同がみられる。

陆1990, は“清楚”を褒義形容詞にあげているが、崔1982, は挙げていない。

- 11 大滝1992. 感覚感情形容詞がとる格として設定した。

- 12 語義が指示する事例（外界と精神界を問わず）のプロトタイプ【現】をアイデアと呼ぶことにする。名称が示す事例にはプロトタイプと周辺的という程度差が存在

するとする論文は、認知言語学の基礎となった業績である。しかし、典型的事例は即概念構造を反映しているのではなく、概念構造は表象からは別次元の「認知の基準点としてのイメージ」によって構築されているとされる。本稿ではそれをイデアと名づけ、そのイデアに対して、言語体系内でも対応する意義素として典型的意義素【義】が存在することを仮定する。典型的意義素の実質については、今後の研究のなかでその説明能力を確認する必要があるが、弁別的特徴と示差的特徴（両者は機能として重複しうる）に相当する意義特徴によって構成され、関連的特徴がはぶかれた意義素として想定される。また、基本レベルの語彙（表象としては分類体系の中の「属」を表す）の意義素に何らかの特徴が見いだし得るかを考察する必要があると予測される。

Brown, Roger. 1958. How Shall a Thing be Called? *Psychological Review* 65: pp14-21

Cain, A.J. 1958. Logic and Memory in Linnaeus's System of Taxonomy. *Proceeding of the Linnaean Society London* 169:144-63

Berlin, Brent, and Paul Kay. 1969. *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley: Univ. California Press

Kay, Paul, and Chad McDaniel. 1978. The Linguistic Significance of the Meanings of Basic Color Terms. *Language* 54, no. 3, 610-46

Rosch, Eleanor, Carolyn Mervis, Wayne Gray, David Johnson, and Penny Boyes-Braem. 1976. Basic Objects in Natural Categories. *Cognitive Psychology* 8:382-439

Rosch, Eleanor, and B.B. Lloyd, eds. 1978. *Cognition and Categorization*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Rosch, Eleanor. 1981. Prototype Classification and Logical Classification: The Two Systems. In E. Scholnick, ed., *New Trends in Cognitive Representation: Challenges to Piaget's Theory*, pp73-86. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates, 1983

13 (注9) 参照

14 筆者がこれまで記述してきた、意義素論に基づく【VA(了)型】の統合意義特徴は以下の通り。

【VA(了)型統合意義特徴I】(大滝1995:p22→改変箇所あり)

VA型はつねに述語動詞が表す動作行為の行われる同じ時点で、設定された何らかのスケールを用いて、動詞が表す「出来事」を形容詞が判断・評価する。
<注>「出来事」；事柄・出来事・事実・現実という4段階の概念体系内の一つ。
動作行為と経過について、事の流れと時の流れとの関係を4段階に区別する。
「現実」は、話し手が発話行為を行う発話時点での事の流れ。

「事実」は、第一人称者が叙述の営みで述べようとする状況（発話場面に對峙する叙述場面。叙述時点と叙述地点が特定された事の流れ。

「出来事」「事柄」はともに特定の叙述場面からは切り離されてクローズアップされる事の流れ。出来事は、どの叙述場面であるかを問わず、相プロセスや動作対象などに特定の特徵指定が加えられている事の流れ。

「事柄」は、動作行為または経過を最も抽象的なパターンとして捉えた“名辞的”概念。

これらの文意味論上の概念を現象素論に置き換えると、すべて前景（＝図）となる現象素（枠）と背景（＝地）となる状況との関係づけ、状況と発話場面との関係づけの区別として記述することができる。

【V A（了）型統合意義特徴Ⅱ】（大滝1995:p20）

V A型は動詞の平相に存在する事物がそのまま異相まで存在した場合（すなわち「動作主格」「動作対象格」として存在した場合）、動作行為を経て平相と異相との状態を具体的に比較した判断結果が、動詞の意義素が指示する「事柄」の中で穏当な変化と認められた場合に「典型V A」となる。

そして他の文法レベルにおけるすべての比較判断基準を付加する（または受け入れて共起する）ことができる。

<注>平相・異相；動詞の意義素の内部構造は3つの相プロセスを表す意味的事項「平相・流相・異相」によって特色づけられる。平相は、動作行為変化が発生するスタート事点前の前提となる状態。流相は、変貌をとげつつある状態。異相は動作行為変化が終了するゴール事点以後の、平相とは異なる状態。

本稿では、動詞の現象素内の構造を考察するにあたり、各相に「第一次格」としてクローズアップできる「格要素」（対象格、道具格、生産物格など）や、「第二次格」としてクローズアップできる格的な物体や事柄（介詞構造で表示できる）の区別を認める。

【（N）V A（了）型統合意義特徴Ⅲ】（大滝1996 b:p131）

形状を表す形容詞を結果補語成分とするには、「述語成分となる動詞の格を担わされた行為対象や生産物」さらには「道具（p134）、当体（p136）、スペース（pp172～174）身体部位（p136）」についての「動詞の異相に存在する物体としての形状に関する弁別的意義特徴」と、その形容詞の弁別的意義特徴とが抵触してはならない。

（この意義素とおしの共起制限を現象枠の観点から捉え直すところ記述できる）

N V A了型内の形状を表す形容詞は「動詞の意義素が表示する現象素に内在する異相に存在する物体の形状」を判断対象とする。

【（N）V A（了）型統合意義特徴Ⅳ】（大滝1996 b:p162）

【動詞が方向指定特徴を持つ場合】

その判断形容詞が使う判断スケールが、動作方向と逆方向である場合には、その判断基準の基準値に比べて必ずマイナス値を示すことになる。しかも、基準値に向けての意図的な修正による変化は表示することができない。

判断形容詞が使う判断スケールが動作方向と順方向である場合に限り、

①基準値に到達したこと②基準値を超過したプラス値も表示できる。

(なお過分義は、判断基準として適正基準が使われた場合にのみ生じる)

動詞の意義素内の格要素に注目した結果、主語の位置と賓語の位置に置かれた場合の統合意義特徴に区別があることを見いだした。

【VA了N型の統合意義特徴I】(大滝1996 b:p145)

動詞の目的語となる名詞の意義素の中に、その動作動詞が表す動作を受けるという弁別的意義特徴が含まれるという、「述語に対する目的語優位の共起制限」が存在する。

【VA了N型の統合意義特徴II】(大滝1996 b:p145)

その判断形容詞について設定される判断基準が「名詞の表す事物に対してイメージされている常識基準」である。

【VA了N型の統合意義特徴III】(大1996 b:p148→追加と改変部分あり)

【Nに対して指示詞による限定修飾が加えられて、統合が成立する場合】

動作行為の対象となった物体、または動作行為の結果生じた生産物にとって、加えられる動作行為が目標とする適正基準が必ず存在していて、「動作行為が失敗して適正基準から逸脱した結果としての過分義」を判断形容詞で表す。

- 15 正確な表現は、「形容詞の格を担った言語形式の意義素が指示する現象素(粹)」であるが、煩雑な表現なので以下、同様の省略表現を用いる。

- 16 理想認知モデルについては以下を参照。

George, Lakoff. 1987 (訳本『認知意味論』p79 ;原著書 p68)

知識を組織化するのに用いられる「理想認知モデル(Idealized Cognitive Model =略称をICMとする)」の存在が実証されているとしたうえで、カテゴリーの構造やプロトタイプ効果はICMによる組織化が生み出すとする。

『各ICMは複合的な組織化された一体、すなわちゲシュタルトであって、その組織化には次の四つの構成原理が用いられる。』

- ①フィルモアのフレームに見られるような命題構造、
- ②ラネカーの認知文法に見られるようなイメージ・スキーマ構造
- ③レイコフとジョンソンが説明しているようなメタファーによる写像
- ④レイコフとジョンソンが説明しているようなメトミニーによる写像

使用された各ICMはフォコニエが記述しているようなメンタル・スペースを組織化する。』

Fillmore, Charles. 1982. Frame Semantics. *Linguistics in the Morning Calm*

pp111-138

Langacker, Ronald, W. 1986. An Introduction to Cognitive Grammar. *Cognitive Science* 10: pp1-40

Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*: Univ. of Chicago Press (訳本『レトリックと人生』大修館書店)

Fauconnier, Gilles. 1985. *Mental Spaces: Aspect of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge, mass: MIT Press

17 服部四郎1966 「意義論：日本の記述言語学（2）第5章」国語学第64集

18 Le si. Ernst (鈴木孝夫訳) 1960 『意味と構造』研究社

相対的な判断を下す際の、潜在的基準として次の4種類をあげている。

①種の基準②比率的基準（同一個体の形状について部分相互を比較する場合、本稿では触れない）③個人的な期待基準④適格基準（ある行為の目的を達成しやすいかどうかについて判断する場合）

本稿での具体的比較基準とは、判断対象格としての資格をもつ「言語形式を用いて表示できる基準」であり、上記の認知過程における判断基準（意義素論では、意味的事項の判断方法に含まれる語義的意義特徴）とは異なっている。

19 筆者がこれまで考察してきた【V得A型】の統合意義特徴は以下の2種類である。

【V得A型統合意義特徴Ⅰ】（大滝1995:p34→改変箇所あり）

V得A型の現象枠には「V得」の意義素が指示する「動詞が他の名詞と結ぶ格関係を充たし、かつ異相まで完遂した現象素」がひとつ存在する。それは、事の流れは示すが叙述時点を担うことのない、「事柄」を表す。

また、その他に形容詞の意義素が指示するもう一つの「格関係を有する現象素（現象素枠の一部となるべき現象素）」が存在する。それら、動詞と形容詞の間では、形容詞が格として判断（評価）対象・描写対象・原因・経験者のどれをとるか、および形容詞が動詞と関連するどの現象素（「V得」を含む）をその格に当てるかによって、複合統合型の統合（被指示物としての現象素枠）が1つ成立する。

【V得A型統合意義特徴Ⅱ】（大滝1995:p39→改変箇所あり）

V得A型では、形容詞が多義語構造を有する場合、本義が第一に優先され、その本義が基本的な格関係を優先的に支配する。

本義から派生義へは原則的に次の優先順位がつけられる。

- ①具体的な形状の判断・描写
- ②スケールが明確で数値化できるような判断
- ③好悪の判断・知覚を基準とした評価
- ④感情・感情を誘発するような状態

【“V得”の文法的意義特徴】(大滝1995:p36→改変箇所あり)

「V得」は事柄を示すにとどまり、動詞の表す弁別的特徴以外は表示しない形式であるために、「弁別的特徴以外の特徴を特に必要とするような動作」の様相である現象素を指示できない。

20 筆者がこれまで考察してきた【A地V型】の統合意義特徴は以下の3種類である。

【A地V型統合意義特徴I】(大滝1996 a:p45)

【VA型を成立させる動詞と形容詞の組み合わせについて】

【形容詞が判断・褒貶形容詞であり、かつ主語が動作主である場合】

動作主がある動作を行うにあたって、動作の異相・流相に対するプランの、たてかた(もくろみ)を形容詞で詳述する。

“很”A形は異相(到達する様相)に対する意志(=もくろみ)を判断・評価対象とし、AA形は流相(動作のやり方)に対する意志(もくろみ)を、描写対象とする。

【A地V型統合意義特徴II】(大滝1996 a:p55)

感覚感情形容詞が原形である場合、動詞の動作主格と形容詞の経験者格とが同一の人物を指示する名詞で担われることによって、形容詞の指示する現象枠と動詞の指示する現象枠とが連結されて、一つの状況(ひとつの叙述時点とひとつの叙述地点で規定される)をつくる。形容詞の現象枠から動詞の現象枠へと事柄が一貫してつながられていく。

感覚感情形容詞が“很”A形になり、経験者格・原因格がふさわしい名詞によって担われたことを、第一人称者から肯定されねばならなくなった場合、経験者格は動詞の動作主格と一致し、形容詞が指示する現象枠と動詞が指示する現象枠とは同じ状況のなかで連結されて、一つの状況(ひとつの叙述時点とひとつの叙述地点で規定される)をつくる。

原因格は動詞が指示する現象枠の事柄さらには状況の一部としての出来事すべてが、第一人称者(通常話し手と一致する)によって感覚感情を引き起こす原因として認知され、評価される。

感覚感情形容詞が重畳形になり、経験者の様子が描写されねばならなくなった場合、描写される対象は動作主を中心とする出来事と同じ状況のなかで並存している、経験者の感覚感情心理である。並存できるかどうかは、まず、動作主がつくる出来事が通常その感覚感情心理を伴いがちだという社会通念を基準として決定されている。

以上の2種類の統合意義特徴を検討する過程で、単独で一つの文法成分を構成する形容詞に対して、副詞との統合や重畳形への変形によって文法成分を構成する場合の形容詞を「評価形容詞形」「描写形容詞形」として区別する必要を認めた。

【A' 地V型統合意義特徴Ⅰ】（大滝1996 b:p168）

動作主がある動作を行うにあたって、動作の異相・流相に対してたてたプランが事実化された時点での状態を、第一人称者が「描写形容詞としての文法的意義特徴（以下「描写特徴」と呼ぶ）」を付加された判断形容詞，すなわち“很”A形とAA形を用いて詳述する。

“很”A形は動作主が目的意識をもって設定した「ある事物の異相で到達すべき状態」を描写対象とし、AA形は動作主が積極的な意志をもって設定した「流相での動作のやり方に関する方向性」を描写対象とする。